

第24回グラフィックアート『ひとつぼ展』 一坪展 公開二次審査会 R E P O R T



『ひとつぼ展』史上稀に見る横一線の混戦 社会的にタイムリーな作品が頭ひとつ抜け出す グランプリ受賞 太湯雅晴

日時 2005年2月17日(木) 18:10~20:40

会場 リクルートG7ビル B1セミナールーム

審査員 50音順・敬称略
浅葉克己(アートディレクター)
タナカノリユキ(アーティスト/アートディレクター)
ひびのこづえ(コスチューム・アーティスト)
若尾真一郎(イラストレーター)
大迫修三(クリエイションキャラーG8)

出品者 50音順・敬称略
池田哲夫 岩松翔太 川上恵莉子 桑原英里 鈴木清美
高橋弘子 西野正将 太湯雅晴 峯岸佳世 米窪雄介

会期 2005年2月7日(月)~2月24日(木)



「審査員を意識し過ぎている」「みんな差がない」
予定の午後6時を過ぎても公開審査会場には10人の出品者、5人の審査員いづれも入ってこない。全員まだ展示会場で、審査員が一人ひとりの作品を念入りにチェックしている最中とのアナウンスが流れる。ということは、展示作品の審査が難航しているということか。一般見学者が始まりを今か今かと待つこと20分。緊張した様子の出品者に続いて、審査員が入場。全員が席に着いて、いよいよグランプリを決める公開審査会が始まった。各出品者が自分の声で自作を説明するプレゼンテーションの概略は以下の通り。

川上

文字を用いて自分を表現したいと思った。なぜなら、文字は言葉の意味以上のものを伝えることがあるから。自己表現としての文字を追求したら、スケジュール帳に行きついた。そこには、さまざまな文字がさまざまなカタチとなってあらわれる。個展プランは、いろいろな人のスケジュール帳をモチーフに、さまざまな人の時間を切り取って見せたい。



桑原

私にとっての paradisa は、すべての生命が笑い、愛し合い、生き生きとしている世界。そんな楽園にトリップすることができるような作品を2年間かけて描いた。原画は大きいので、展示物はその1/4サイズにしてプリントアウトしたもの。見る人がパワーを感じるような表現をめざした。個展は壁も床も天井も作品で覆い尽くしたいと思う。

峯岸

一人ひとりにとって、大切なかけがえのない一冊の本を作りたいと思った。紙をめくるとの感触や音、次のページへの期待感といったものを多くの人と共感したい。そんな考えから、約50種類の紙を綴じて、見る人それぞれにナンバリングしてもらおうという参加型の作品に。個展では自分にとって大切な人に向けた一冊を作りたい。



岩松

テーマは「生きる神秘」「死と再生」。人間が生きて行くなかで根底にある「喜び」や「哀しみ」を絵で表現した。表面的な面白さだけにとられないようにテーマやコンセプトを深く追求して、自分自身の生きている証しを魂を込めて描こうと思った。個展では、これからの一年でいろんなことを感じてその都度思ったものを描きたい。

鈴木

いつも強いインスピレーションを与えてくれる風景を視覚的に表現しようと、タイトルも「花」とつけ加えた。立体のコラージュと平面画を組み合わせて、しなやかに形を生み出してゆき、イメージする風景に近づけていった。一年後の個展もこの作品の延長上で制作し、もっと広がりのある表現にしたい。



太湯

自分の作品の価値について考えた末の表現。自分の作品が他人にも価値のあるものであってほしいと、オリジナルの紙幣を作った。そして、この紙幣でいろんなアーティストの作品を購入することができたら、この紙幣が流通することでさまざまなコミュニケーションが生まれると思った。個展では会場を巨大な金庫に見立てて展示したい。

米窪

青空を強くイメージした作品。自分はやさしさ、さびしさを感じる町に強く惹かれる。そのイメージのなかにある町の風景を絵にした。絵を展示している額は厚紙とアクリル板を使って手作りしている。個展では今回の作品を含めて40点くらいを展示したい。イメージとしては、子供が公園で遊んでいる、そんな空間を作りたい。



高橋

毎日見る顔に何かを描いたり、貼ったりすると楽しいと思い、顔をモチーフにした作品を考えた。作っているうちに楽しくなり、お祭り気分で行くようなものを盛り込んで。顔を神社に見立てて飾り立てた。個展はいろいろな顔のレビューをやりたい。ホストあり、イケメンあり、世界中の顔あり、髪の毛を集めたヘアートンネルも作りたい。

西野

見たこともない風景の中にある鳥がテーマ。ここから弱さの中の強さや広がりを感じてもらいたい。自分で思い描いた風景を絵にしたり、ジオラマを作って見る人のイマジネーションを膨らませたいと思った。個展では、映像や写真を組み込みながら、身近なものを題材に島の風景を作ってみたい。



池田

描いている時には、特にテーマを意識しないが、無駄に犠牲を強いられたいとか、理不尽に犠牲を強いられるに耐えたいとか、そういったものをモチーフにしていることが多い。深く考えず気軽に面白く作ってもらえたらいいと思う。さらに絵のモチーフを立体化したいと考え、ローソクを作成した。実際に火を灯し溶ける様がきれいなので、個展ではその様子も映像で流したい。一つ一つの作品を独立した形で展示したい。

全員のプレゼンを聞き終えて、まずは審査員一人ひとりに全体の感想を語ってもらった。

今回、初審査となるタナカさんば「ポートフォリオよりも実物の展示作品を見ることができて良かった。ただ、みんな審査員を意識し過ぎているんじゃないかな。もっと自分が信じたものを出してもいいと思う」との感想。若尾さんは「うーん、悩んでいます。まだ、どれも決め手が無いね」と迷っている様子。ひびのさんば「みんな差がないですね、一年後の個展に向けてよりもこの『ひとつぼ展』で勝負してほしかった」と困惑さみ。浅葉さんは「作品が多様化してきたね。いろんな方向があっておもしろいと思う」と言えば、「しかし、これといった決め手のある作品はなかった」と大迫さんも的を絞りにきれない。

「社会的にタイムリーだった」「笑わせてもらいました」

ここで、一人ひとりについて意見交換が行われた。まずはトップバッターとしてプレゼンテーションした川上さんの作品について。「すごく大人な考え方の仕事ができていると思う、今すぐグラフィックデザイナーとしてもやっていけそうだね。ただ、昔のいいタイポグラフィに似ているところもある」とタナカさんが評価すると、「言葉、文字、タイポグラフィ、どれもすごく完成度が高いね」と浅葉さんも同意見。一方、若尾さんは「プレゼンでのコンセプト説明がわかりにくかった。展示をもう3次元4次元に発展させるとかの工夫があってもよかった」と言えば、ひびのさんも「『ひとつぼ展』として、あの展示方法が有効だったとは思わない」と展示についての注文もあった。大迫さんから「ちょっとオーソドックスにまとまっていたね」との意見も。

ローイング自体はいいと思うけど、ここで展示されるとどうだろう」と言えば、「新鮮なものを出してほしかった」と若尾さん。

太湯さんの作品について。「社会的にタイムリーだった。それにグラフィックデザインとしてオリジナルな表現ができていると思う」とタナカさん。「お礼自体に魅力があるのか？ 今後どう発展させていくんだろう？」とひびのさん。「いろんなお札のパージョンを展示するのかもしれない。こう来たかという感じ」と大迫さん。若尾さんも「展示も考え方も良かった」と言う。浅葉さんも「世の中をよく捉えていると思う、もっとたくさん量を作ってほしいね。金庫室にも入ってみたい」と笑顔で語る。

次に桑原さんの作品について。タナカさんが「今の時代に何年もかけて作品を作るというのは、ちょっと狂気の得意なこと。時間の使い方として圧倒的にすごいと思う。クリエイティブの根源的なエネルギーが感じられる」と言えば、若尾さんが「イラストレーションとしては、やや典型的な表現のような気もする。もっと自分らしさを掘り下げたほうがよかった」と表現に触れる。ひびのさんは「プレゼンで展示作品とは別に原画を見せることはどうだろうか？」と疑問を投げ掛け、「モチーフに新鮮さがなかった」とも。浅葉さんは「方向性はいいと思う、圧倒的な量感がいいね」と評価。笑いで

米窪さんの作品について。タナカさんが「青い空を基調とした孤独感がいいと思う、ポートフォリオにあった新作よりもこちらの表現がいい」と言えば、浅葉さんは「これよりも新作のほうがいい」と反対意見。若尾さんは「新しいチャレンジはいいと思うが、自分も新作よりこちらがいいと思う」と意見。「この表現で見つけたものをもっと掘り下げてみては」と大迫さん。「構図と画の切り取り方がいいと思った」とひびのさん。

峯岸さんの作品について。「ポートフォリオが良かったので実物で少しがっかりした。参加型ということを意識しすぎたのかな」とタナカさん。「数字の感触を楽しみたかった」とタナカさん。「参加型といっても数字を刻むだけでは物足りな過ぎる」と浅葉さんも手厳しい意見。「もっと好きなことを徹底的にやってほしかった」とひびのさん。

高橋さんの作品について。タナカさんが開口一番「笑わせてもらいました。展示と本人のキャラクターが一貫しているのいい。これはもう立派なアート作品ですよ、十分コミュニケーションできている、今の勢いのままに突き進んでほしい」と絶賛すると、ひびのさんも「ポートフォリオは気に入っていた。今回の展示はいい意味で裏切られて気持ち良かった」と笑顔。大迫さんも「やりたいという欲求が感じられた」と言えば、「底知れない写真の良さがある」と若尾さん。浅葉さんに「今日は」「今日の写真のように顔にメイクして本人が登場してくれば良かったのね」と冗談とも本音とも取れる発言。

岩松さんの作品について。「手描いたものは自分らしさが出ていると思う、デザインを絵の中に入れていけなかった」とタナカさん。浅葉さんは「墨絵に期待が持てるね」と評価すると、若尾さんも「コンセプトや考え方は良かった」と好印象。「ちょっとテーマが重かったかな」と大迫さんが言う。ひびのさんは「なかにはちょっとフツ切れそうなものもあった、もっと自分を壊す気持ちで」とアドバイス。

西野さんの作品について。タナカさんが「ポートフォリオは評価していたが、この展示では自分の良さが失われていた。もっとアイデアで突き抜けてほしかった」と言い、大迫さんも「コンセプトがリアルなのに表現が物足りなかったね」と同意見。ひびのさんは「このなかではタバコの箱で鳥を作ったものが好き、もっと自分のやりたいことを思いきってやってよかったのでは」と言及。

鈴木さんの作品について。タナカさんが「既視感がある、海外のアーティストがやっていること。いろんな影響を受けるのは良いが、好きだけじゃないところまで突き詰めてやってほしい」と指摘すると、ひびのさんが「何かに似ているのいいと思う、本人らしさが出ていないのが一番残念。この先、自分を壊していい」と続ける。「タイトルを直前まで変えてみたり、本人が迷っていたね」と浅葉さん。大迫さんが「ド

池田さんの作品について。「不思議な絵がイマジネーションを広げた、もっと大量に展示しても良かったと思う」とタナカさん。「『ひとつぼ展』ならではのものを見たかった、プレゼンでもっと主張するべきだね」と若尾さん。「自分の世界でやる」という姿勢が気に入った」とひびのさん。「もっと本気で描けばいいと思う」と大迫さん。

「……」「一年後の個展を見たいのは誰か」
全員に対する意見交換が終わったところで、それぞれの審査員が3名ずつグランプリ候補を発表。その結果は、

浅葉 / 川上	太湯	米窪
タナカ / 桑原	高橋	川上(0.5票)
ひびの / 桑原	太湯	高橋(0.5票)
若尾 / 太湯	米窪	高橋
大迫 / 川上	桑原	米窪

これを集計すると、
太湯 / 3.5票 桑原 / 3票 米窪 / 3票 高橋 / 3票 川上 / 2.5票

大迫さんが得票数を読み上げると「……」審査員一同、しばらく沈黙。ここでまだ決め手に欠ける様子。そこでタナカさんが「要は一年後の個展を見たいのは誰か、ということですね」とグランプリの意味を再確認する。一同、また沈黙。そして、今度は2名ずつグランプリ候補を挙げることにした。

と見てみたい。ひびのさんが「この作品は今見ないとダメだと思って入れた」とタイムリー性を強調。桑原さんに票を入れたタナカさんが「会場の360度に展示される作品の中に身をうずめてみたい」と言えば、大迫さんも「そのまま描き続けたいからどうか見てみたい」と絵のスケール感に期待。それぞれの意見を聞いたところで、この3人の中から最終決戦ノミネーターを選ぶことになった。

高橋 / 3票(タナカ、ひびの、若尾) 桑原 / 2票(タナカ、大迫)
太湯 / 2票(浅葉、ひびの) 米窪 / 2票(若尾、大迫) 川上 / 1票(浅葉)

太湯 / 2票(浅葉、ひびの) 米窪 / 2票(若尾、大迫) 桑原 / 1票(タナカ)

この結果から、1票しか入らなかつた川上さんが落選。3票とトップの票を集めた高橋さんは最終決戦へ残り、2票で並んだ桑原さん、太湯さん、米窪さんの3人からさらに絞りこむことになった。ここで3人に対する応援演説をしてもらった。米窪さんに票を入れた若尾さんは「町というテーマ、このスタイルで描かれた絵をもう少し見てみたい。大迫さんは「今も表現とって十分強いと思っているが、一年後の成長を期待したい」と共に個展への期待感高し。続いて太湯さんへの応援として浅葉さんが「あのお札をもっ

ここで2票ずつ入った太湯さんと米窪さんが最終決戦へ。1票の桑原さんが落選。あらためて高橋さん、太湯さん、米窪さんの3人の中からグランプリを決めることになった。そして高橋さんに対する応援演説をタナカさんが「個展でどうなるか見えないところがいい、今までの『ひとつぼ展』になかったものが現れそう」と語り、いよいよ審査員一人ひとりがひとりだけをつまみ食いするところになった。

「審査員の皆様ありがとうございます、今まだ手が震えています」
太湯 / 2票(浅葉、ひびの) 高橋 / 2票(タナカ、若尾) 米窪 / 1票(大迫)

ランプリ作品は今までにありそうでないもの。自分は審査員の方に評価していただいた町の風景をもっと突き詰めた」とサバサバした表情。桑原さんは「公開審査はドキドキした。今のスタイルを続けていきたい」と自信を得た表情。川上さんが「こうして作品を展示するのは難しかったです。早くプロのグラフィックデザイナーとして仕事していきたいです」と将来を語る。峯岸さんは「やりたいことはやりました。自分のやりたいことを追求したい」とホッとした表情。若尾さんは「自分でもまだまだだと思、これをバネにして頑張ります」と前向き。鈴木さんは「いろんな人の意見が聞けたのがよかったです、やりたいことは決まっていますから」とふつ切れた様子。西野さんは「悔しいけれど自信もなかった」とやりたいことを再確認したという。池田さんは「プレゼン不足が反省点」とくやむが作品には満足そうな様子。いつもより長い準備会も反響もつれた末のグランプリ決定。グランプリ受賞の太湯さんにタナカさんが期待した「世間を騒がせている偽ラッシュに負けたくないようなパワーを期待したい」というコメントが印象だった。

文中一部敬称略 取材・文 / 田尻英二